神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Conjugal union as a holy communion : love and faith in paradise lost (part II)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2005-09-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西川, 健誠, Nishikawa, Kensei
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/680

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

夫婦の交わり，神との交わり

――『楽園喪失』における夫婦愛と信仰(下)――

西　川　健　誠

(目　次)

Ⅰ　序
Ⅱ　聖なる夫婦愛（第四巻）
Ⅲ　綻ぶ夫婦愛――別離の場面（第九巻前半）
（以上「上」。前巻掲載）
Ⅳ　失楽と夫婦愛の転落(第九巻後半)
Ⅴ　夫婦の和解，神との和解(第十巻)

Ⅳ

妻対夫との関係と，神対人間との関係とは密に結びついている，というのが前段での考察であった。とすれば神対人間の関係が崩壊する時，夫婦としてのアダムとイブの関係も崩壊するのも当然であろう。『楽園喪失』の第九巻の後半は，原罪の結果，垂直方向の関係が破綻するのみならず水平方向の関係も破綻する様を描いている。

先に禁断の実を食らうのはイブである。この行為の結果は直ちに彼女の言動にあらわれる。原罪を犯す前においては「賛美と感謝を捧げる義務を負う」対象として神を認めていたイブでありながら（cf. 'We to him indeed all praises owe, / And daily thanks'[IV, 444-445]），禁断の実を食らった直後の独白中では神を「偉大な禁止者」（'Our great forbidder'[IX, 815]）と貶める。堕罪前にはもっぱら神のみを拝していたのに，

[H]enceforth my early care,
Not without song, each morning, and due praise
Shall tend thee[.]
（これからは毎朝，歌と共に
あなたを世話し，あなたにふさわしい賛美を
捧げることにしましょう）　(799-801)

と，礼拝の対象を禁断の実に変えることを宣言し，事実，この後ことばだけでなく，跪きという動作でも禁断の実を拝している（'low reverence'[835]）。禁断の実を口にすることじたい神への造反である以上，こういう被造物崇拝の言動・行動が出てくるのは当然かもしれない。

このような神との関係の変化は，夫との関係の変化に繋がる。かつてのイブのアダムに対する接し方には見られなかった，manipulative な姿勢が浮上するのだ。例えば，禁断の木の実を夫と分かちあうべきか，いや，そうしない方がよい，と自問自答する彼女は

[Shall I] keep the odds of knowledge in my power
Without copartner? So to add what wants
In female sex, the more to draw his love[?]
（知識という強みを，自分の力の中に独り占め
しておこうか？そうすれば女という性の中に欠けるものを
増し加え，いっそうかれの愛を引き付けることになる）　(820-822)

と語っている。夫の有していないものをより大きな愛情を引き出すための道具にする，という姿勢には，配偶者を一種の競争者に見立てる態度，堕罪前の牧歌的な夫婦関係にはなかったマキャベリ的要素を見て取らざるを得ない。上の言葉の後，翻って彼女は禁断の実をアダムにも分かつこととするのだが，その理由付

けも問題だ。もし神が言葉通り死という罰を自分に下したら，という想定に続けてイブが語るのは

Then I shall be no more,
And Adam wedded to another Eve,
Shall live with her enjoying, I extinct:
A death to think.

（そうしたら私はもういなくなり
アダムは別のイブと結婚して
私は消滅しているのに，その女と楽しんで生き続けることになる。
考えるだけで死も同然）　(827-830)

という言葉である。一見夫婦の絆の強さを伝える言葉のように読めるが，別の女性に夫を取られるという嫉妬心を理由にして配偶者を巻き添えにするのは，真の夫婦愛と呼び得るか。「殺人未遂」というC.S.ルイスの糾弾は大袈裟にせよ，[1] 上の詩行からは確かに，アダムを自分の意のままにしたい，というイブの無自覚の支配欲，所有欲が感じ取れる。さらに彼女が

Adam shall share with me in bliss or woe
（アダムには喜びも苦しみも私と分かちあってもらう）
(831)

と語るとき，その支配への意志は文法的に明確になる。話者の意志を表す意志未来の助動詞の shallが，イブがアダムを自らの意志の下に置こうとしていることを伝えている。

イブのアダムに対する態度の変化は，アダムに対し禁断の実を食らうよう勧める箇所でさらにはっきりする。上で見た通り，彼女は少なくとも一度は，自らの

優位を確保するには夫に禁断の実を分かつまい，と考えた。また，結局はそれを分かつことにしたにせよ，それは自らの死後，アダムが別の女性の所有になることを嫉妬してのことであった。にもかかわらず彼女は

> [W]hich(i.e. the effects of the fruit) for thee
> Chiefly I sought, without thee can despise.
> For bliss, as thou hast part, to me is bliss,
> Tedious, unshared with thee, odious soon.
> （禁断の実とその効能を求めたのは，第一に
> あなたのことを考えてでした。あなたなしならば軽視できるもの。
> 喜びも，あなたも与ってこそ，私にとり喜びなのであり
> 分かちあわなければ，すぐに退屈で厭わしくなります）　(877-880)

と述べている。六十行弱前の彼女の言葉と照らし合せた時，上の詩行は嘘，それが言い過ぎであれば自己欺瞞と呼ばざるを得ないであろう。アダムと生においても，死においても一体でありたい，という感情から見れば，上述の引用の後ろ二行は真なるものかもしれないが，彼女が禁断の実を食らい，また今アダムに分かとうとしているのは，「第一にあなた(＝アダム)のため」ではなく，彼女自身の欲望のためであるからだ。読者はともかく，ミルトンの語り手がイブの言葉を欺瞞と判定していることは，彼が彼女に与えている描写からわかる。語り手は，アダムに向かい語りはじめる前のイブの顔には

> [I]n her face excuse
> Came prologue, and apology to prompt[.]
> （「言い訳」が口上役として，「弁解」が
> 後見として現われた」）　(853-854)

と評しており，語り終わった後には

> ‘[I]n her cheek distemper flushing glowed’
> （彼女の頬には混乱が紅潮と共に現れた）　(887)

と述べているからである。この一行を読んだ『楽園喪失』の読者は，アダムとイブから楽園を奪うことを決意したその時に，セイタンの顔が「怒り，嫉妬，絶望の激情のために曇り」（‘[E]ach passion dimmed his face / ...ire, envy, despair’[IV, 114-115]），本来天使であれば見せるはずのない「醜い混乱状態」（‘distempers foul’[118]）を晒した，と語り手が評していたことを思い出すかもしれない。神以外のものを拝したこの妻は，今や夫婦愛を口実にして夫を自らと共に転落させんとしている。語り手は，天上を追われた腹いせに人類まで転落させようとしたセイタンと同じ生理学的な罰を，自らが転落したことを理由に夫まで転落させようとしている彼女に与えているかのようだ。

進んで夫を原罪に巻き込もうとするイブに比べると，アダムはいたって受動的に見える。語り手からイブにとっての神の代役であることを求められたアダムだが（cf. ‘He for God only, she for God in him’[IV, 299]），イブから失楽を告げられたアダムは，この役はおろか，自由な主体であることまで放棄したように見える。かれが

> How can I live without thee, how forgo
> Thy sweet converse and love so dearly joined
> To live again in these wild woods forlorn?
> （これほど親しく結ばれたお前から離れ，
> お前との甘い語らいと愛を打ち捨て
> この物寂しい森に住むことなどどうしてできよう）　(908-910)

と嘆くのを聞くとき，読者は，かれの妻への愛着に共感すると同時に，妻との愛と交わり（'converse and love' [909]）を保ちたいあまり，自らの造り手とその造り手により与えられた自由な判断力とを忘れてしまった人間の姿を見ないか。楽園において夫婦の交わりは確かに嘉せられていた。だがここでは，かれはその水平方向の交わりに耽溺して，神との鉛直方向の交わりを思考の中からいつの間にか排除してしまっている。あるいは，イブが一人で立つことに固執して転落したのに対し，アダムは一人で立つことを恐れたがゆえに転落した，と言うことも出来るであろう。

このような精神の独立の喪失と並行するかのように，アダムはイブを自分と別個の人格の持ち主と見ることが出来なくなっている点にも注意したい。「そなたは肉より出でる肉，わが骨より出でる骨」（'[F]lesh of flesh, / Bone of my bone thou art'[IX, 914-915]）とは，確かにかれの肋骨からイブが創造られた時にアダムがイブを祝福して発した言葉と同じである(cf. VIII, 495)。だが今やかれが今「私は/自然の鎖が私を引き付ける」（'I feel / The link of nature draw me' [IX, 913-914]）と，あるいは

So forcible within my heart I feel
The bond of nature draw me to my own
My own in thee, for what thou art is mine;
Our state cannot be severed, we are one,
One flesh; to lose thee were to lose myself.
（実に強力にわが胸の中で，自然の縛りが
私を私自身に，お前の中にある
私自身に引きつける。お前の本質は私の本質であるから。
私たちの境遇は切り離すことが出来ぬもの，我らは一対，
一つの肉なのだ。お前を失うことは私自身を失うことだ）（955-959）

と語る時，そこに聞き取れるのはある種の自己愛＝ナルシシズムではないか。[2] アダムはイブを他者としては見ておらず，専ら自らの延長としか見ていない。他者と交わるのではなく，自らと交わろうとしているのである。このような他者愛から自己愛への転落の中で，究極の他者である神との交わりは排除されてしまう。

「愚かにも女の魅力にまけて」（'fondly overcome by female charm' [999]）アダムが禁断の実を食らった時に，原罪は完成する。かくして神との関係の破綻が決定的になった時に，夫婦二人の関係の転落もより深刻なものになる。かれらの関係を一貫して「愛」（love）と評してきた語り手は，ここで初めて「愛欲」（'lust' [1015]）という語を用いているのである。原罪によりアダムとイブの間の関係から精神性が喪失されたということを意識してのこの語の選択であろう。実際，二人の身体の動作からは，失楽前に備えていた清らかさが失われる。[3] アダムがイブに送る視線は「淫ら」になり，受けて返すイブの視線も「咎められる所のない」（'unreproved' [IV, 492]）ものからアダムの視線に劣らず「浮気な」ものへと劣化する（'[H]e on Eve / Began to cast *lascivious* eyes, she him / As *wantonly* replied' [IX, 1013-1015, 強調は西川]）。抱擁にしても同様である（'[H]e *forbore not*...toy / Of amorous intent, well understood of Eve' [1034-1036, 強調は西川]）。二人が最初に読者の前へ姿を現し，そして至福の四阿に向かった時，かれらは手を繋いでいた。いや，それよりさらに前，水に映る自分の姿に恋したイブの手をアダムは「穏やかに掴んで」（'[T]hy *gentle* hand / Seized mine' [IV, 488-489, 強調は西川]）いた。ここでも再びアダムはイブの手を掴むのだが，その動作から「穏やかさ」は失われている（'[H]er hand he seized' [IX, 1037]。堕罪後の二人の動作からは，堕罪前の二人の交わりには見ることが出来た清らかさ，それに伴っていた慎みや雅やかさが失せている。

夫婦としての二人の行為のうち最も聖なるものとして位置づけられていたのは，肉体の交わりであった。それだけに二人が原罪を犯した時に，交接の堕落が最も大きな堕落となろう。堕罪前のアダムとイブが交接を行う場所は「至福のあずま

や」であり，そこが一種の至聖所として描かれていたのは，前節で見た通りである。ところが禁断の実を食らった二人が肉体の交わりの場所とするのは「鬱蒼とした台地」（'a shady bank'[1037]）である。かれらにとっての至聖所は放棄され，二人は祭司であることをやめたことが示唆されている。

ただし注意すべきなのは，その「鬱蒼とした土手」と，そこで取り交わされる性とを描く際の，語り手の微妙な逡巡だ。もし語り手が神の弁護人たることを自ら任ずるのであれば，堕罪前と堕罪後の性交の間の違いを曖昧さなく指摘しなければいけない。だが実際の語り手の振る舞いにはどこか逡巡が感じられるのである。例えば，問題の「鬱蒼とした土手」の描写を見てみよう。語り手はそこを

> Thick overhead with verdant roof embowered
> （頭上に厚く茂る緑が屋根となって覆っている場所）　(1038)

と形容し，続けて

> [F]lowers were the couch,
> Pansies, and violets, and asphodel,
> And hyacinth, earth's freshest, softest, lap.
> （花々が床であった。
> パンジーに菫に，不凋花にヒヤシンス，
> 大地の最も鮮やかな，最も柔らかいものが膝となって）(1039-1041)

と記している。「最も鮮やかな，最も柔らかいものが」と最上級を二つ連ねたあたり，実に魅惑的である。こういう魅惑的な言葉の中に，堕ちてしまった筈の二人の性の中にある妖しい魅力に抗しきれずにいる，揺れる語り手の姿が見て取れないか。そもそも「至福のあずまや」も鬱蒼と茂る緑の葉を屋根とし（'the roof

/ Of thickest covert' [IV, 692-693]), 床は花で飾られていた('With flowers, garlands, and sweet-smelling herbs / Espoused Eve decked first her nuptial bed' [IV, 709-710])。屋内，屋外の差は決定的であろうが，二人にとっての至聖所ともいえた至福のあずまやのもつ属性が，堕ちた性の舞台にも引き継がれてしまっているのは否定できない。

二人が交接する場面の描写についても同種の問題がある。語り手によれば

> There they their fill of love and love's disport
> Took largely, of their mutual guilt the seal,
> The solace of their sin, till dewy sleep
> Oppressed them, wearied with their amorous play.
> (そこで思う存分愛と愛の戯れを
> 堪能した。互いの間の罪悪感を
> 罪ある慰安で封印して。やがて露のような眠りが
> 愛の戯れで倦んだ二人の上を覆った) (IX, 1042-1045)

と言う。「罪悪感」(guilt),「罪」(sin) という言葉が登場して二人の性の堕落を伝えているにしても，そこにまだ「慰安」(solace) がある，と記され，また交接に「倦んだ」(wearied) 彼らであるにせよ，その彼らになお「露のような」(dewy) 眠りが訪れるものだった，とも述べられている。さらにいえば，一度は登場した「愛欲」(lust) という語が消え，「愛」(love)という言葉が再度現われている。このあたりにも，堕ちたアダムとイブの関係を断罪しきれずにいる語り手の惑いを見ることが出来ないか。[4]

しかし，眠りから覚め罪悪感に苛まれ始めるアダムとイブの姿を描く段になると，語り手の視線ははっきり冷めたものに変化する。肉体の目は開いても精神の目は蒙くなった('their eyes...opened, and their minds / ...darkened' [1053-54]) という二人に対して，語り手の同情は感じられない。失楽前の二人

の裸体にかれらの精神の輝きを見て取り（cf. 'naked majesty'[IV, 290]），読者を当惑させる程にその姿を称賛していた語り手であった。だが同じ語り手は，今や罪意識を持つ者となった二人を評して

[They were] naked left
To guilty shame.
（裸体のかれらは罪と恥に対して
無防備の状態にあった）　(IX, 1057-1058)

と記す。精神の脆弱性をかれらの裸体(naked)性とかけて伝えているところに，これまでにはなかった語り手の突き放した姿勢が見てとれると思う。この pun から伝わってくるのは，裸体とその体現する精神の高貴さへの熱い思いのちょうど裏返しの，幻滅・冷やかさではないか。同種の姿勢は

[H]e(=shame) covered, but his robe
Uncovered more.
（恥は覆おうとしたが，恥の衣は
[罪を]いっそう露わにするのみであった）　(1058-1059)

あるいは

[It was a] vain covering if to hide
Their guilt and dreaded shame.
（[イチジクの葉は]かれらの罪，恐怖，恥を
隠すには空しい覆いであった）　(1113-1114)

といった，アダムとイブが陰部を隠そうとする場面の描写にも見られる。「覆う」

(cover) という単語がしつこい程多用され，しかも「覆うとしても露わになる」「覆い隠すには空しい覆い」というパラドクシカルな言い方の中で用いられている。気恥ずかしい程正面切った失楽前の性の理想化の語調とは対極的な，皮肉でシニカルな語り手の声が聞えてくる。失楽直後二人が交わる姿には，堕ちたと認めつつなおある種の魅力に抗えずにいた語り手も，「かの偽りの果実」('that fallacious fruit' [1046]) と彼が形容するものの効果がはっきりアダム・イブの心理に現われるのを見て，現実主義者に転向したかのようだ。

堕ちた体の交わりに続くのは，堕ちたことばの交わりである。「怒り，憎悪 / 不信，猜疑，不和」('anger, hate / Mistrust, suspicion, discord' [1123-24]) に苛まれ心中での和合を失った二人に，調和ある言葉を交わすことは最早不可能なのであろう。アダムが三人称を用いて

> Let none henceforth seek needless cause to approve
> The faith they owe; when earnestly they seek
> Such proof, conclude, they then begin to fail.
> (今後は誰にも，自分の持っている信仰を試す
> 機会を与えてはいけない，たとえしつこくそういう機会を求めて
> きても，だ。すでに堕ち始めているのだから) (1140-42)

とイブに当てつけをいえば，イブも負けずに開き直って

> Was I to have never parted from thy side?
> As good have grown there a lifeless rib.
> (あなたのお傍から離れてはいけなかったとでもいうのですか。
> それでは生命のない肋骨になっていたほうがましです) (1153-54)

と応ずる有様である。第九巻前半，一日の労働の分担をめぐるやり取りにおい

てもすでに，二人の会話に険があったが，それでもなお妻には「甘美さ」はあり（'*sweet* austere composure'[272]，'with accent *sweet*'[321]。強調はいずれも西川）夫にも「心配り」（'care and matrimonial love'[318-319]）があった。しかしここにあるのは，あからさまの非難とあからさまの居直りのみである。「語らい」（conversation）はもはや存在せず，存在するのは「意地の張り合い」（'contest'[1189]）だけ，といえようか。語り手も，この夫婦間の破綻――ことばによる交わりの破綻――を冷たく突き放してみている。かれらの罵りあいを「実りのない」（'fruitless'[1188]）なものと形容する時，そこに「実」（fruit）を食らって転落した二人への揶揄があるのは言うまでもない。

会話のいき違いからアダムとイブは互いの元から離れ，それが伏線となって堕罪がおきた。堕罪後，神をではなく禁断の実を拝することで，かれらは祭司として転落し，さらには二人の体の交わりも聖性を失う。この転落の最終段階が上で見た痴話喧嘩といえよう。鉛直方向の関係の破綻の引き金となった水平方向の関係の軋みは，一巡してその関係の破綻に至ったのである。

V

禁断の実を口にした罪に対して神からの裁きをうけた[X，102-208]後，しばらくはアダム・イブ二人の間に会話は見られない。神との交わりを自ら放棄してしまった結果，お互い同士の交わりももはや成立しなくなってしまった二人は，垂直・水平両方向いずれにおいても交わりの外に出てしまった状態＝破門状態（ex-communication）にあるかのようだ。

この状態が顕著なのはアダムの方である。地獄からやってきたセイタンがいざ楽園を目前にすると「衷なる地獄」（'hell within'[IV，20]）に苛まれて独白に耽った[IV，32-113]のと同様，アダムも堕罪による罪悪感のゆえに「荒れる情念の海に翻弄され」（'in a troubled sea of passion tossed'[X，719]），百行以上にわたる独白をしている[720-844]。ある批評家は「『楽園喪失』の

登場人物は転落してはじめて独白する」とコメントしているが[5]，この見方に従えばアダムの独白はセイタンのそれ同様，他者との交わりという面における原罪の結果と見られよう。独白を続けながら次第に自家中毒に陥っていったセイタンと同種の自己閉鎖への傾向が，アダムの独白の中にも認められる。

交わりなき状況を打破すべく最初に行動するのはイブだ。再び対話の回路を開くべくアダムに近づき言葉をかける（863-865）が，かれはこれを受け付けない。それどころかまず視線でもって彼女を斥け（'Her with stern regard he thus repelled'［866］），追い討ちをかけるように今度は言葉で

> Out of my sight, thou serpent, that name best
> Befits thee with him leagued, thyself as false
> And hateful[.]
> （失せろ，この蛇め。あいつと共謀したお前には
> 蛇という名がふさわしい。蛇と同じくらい嘘つきで
> 憎むべき者なのだから）　（867-869）

と，彼らを騙した蛇と同列にイブを並べて罵倒している。自らを神との交わりから排除した後，今度は妻を自らとの交わりから排除している，といえようか。同種の排除の姿勢は「お前さえいなければ，自分は幸せなままでいたのに」（'But for thee / I had persisted happy'［.］）という仮定法過去完了ではじまる，延々16行にわたって続く文にも聞き取れよう（873-888）。実際に「いた」相手が「いなかった」状況を仮定する独りよがりな想像の中で，かれは堕罪がかれ自身の決断であったことを故意に忘れようとしている。排除の姿勢が最も悪質な形をとるのは「生まれつき/曲がった肋骨も同然」（'all but a rib / Crooked by nature'［884-885］），あるいは「見かけだけ美しい／自然界の瑕疵」（'this fair defect / Of nature'［891-892］）といった女性嫌悪の言葉だ。表現に気が利いているだけにいっそう，妻を交わるべき相手として見ることを拒む，アダムの精

神の意地悪さが伝わってくる。

女性嫌悪の言葉はさらに結婚嫌悪の言葉に繋がる。失楽前，妻と共に神へ捧げた感謝の祈りの中で，夫婦生活を「あなた(＝神)によって定められた，私たちの至福の中でも筆頭の至福」と呼んでいたアダムであった（'our mutual help / And mutual love, the crown of all our bliss / Ordained by thee' [IV, 728-730]）。そのかれがここでは「窮屈な結合」（'strait conjunction' [X, 898]）といって夫婦生活を貶めている。興味深いのは，この言葉がセイタンの言葉を響かせている点だ。「緊密な」という意味の形容詞 strait に「窮屈な」の意味を忍ばせる pun は，睦びあうアダムとイブを目にしたセイタンが，二人を陥れようと自らに誓った際用いたものであった（cf. '[L]eague with you I seek, / And mutual amity so *strait*, so close, / That I with you must dwell, or you with me / Henceforth' [IV, 375-378. 強調は西川]）。神に逆らい自らを神との交わりから破門（ex-communicate）したセイタンと同じ轍を，頑なに妻を自らとの交わりの外（ex-communicate）に置こうと――というか自らを妻との交わりの外に置こうと――しているアダムが踏んでいることの傍証が，この同じ strait という語の選択かもしれない。

妻を破門するアダムの頑なさ（'He...from her turned' [X, 909-910]）に比べると，破門されてもなおも交わりを求めるイブの態度は健気である。「お見捨てにならないで下さい，アダム」（'Forsake me not, Adam [914]），「取り去らないで下さい...あなたの穏やかなお顔，あなたの助け，この並外れた苦境にあってのあなたの助言を」（'Bereave me not, / ...thy gentle looks, thy aid, / Thy counsel in this uttermost distress' [917-919]）と，命令文を畳かけて夫に迫るイブは，言葉を用いて夫にまさに「縋りついて」（'clasp' [918]）いる。夫のために自らを犠牲にすることも厭わない。932-936行目にある通り

> And to the place of judgment [I] will return
> There with my cries importune Heaven, that all

The sentence from thy head removed may light
On me, sole cause to thee of all this woe,
Me, me only just object of his ire.
（裁きの場に私は戻り，そこで
泣き叫びの声をもって天に懇願します。全ての
罰が，あなたの頭上から取り去られ，私の上に
下されるよう。あなたに及んだこの不幸の唯一の原因である以上
私，私のみが神の怒りを受けるのに相応しいのです）　(932-936)

と，彼女はアダムの分の罰までを一身に受けることを提案しているのだ。この言葉の中に，自分の頭上に子々孫々の罪の呪いが降りかかることを嘆いたアダムの言葉（'On me, me only, as the source and spring / Of all corruption, all the blame lights due' [832-833]）に聞き取れるのと同種の egotism を聞き取る厳しい見方も出来ようが，[6]「交わり」という角度から見ればこのイブの言葉は「他者」への共苦＝共感（com-passion）の姿勢を見せている点は評価できよう。御子が父なる神を前に人間のための贖罪を申し出た際の言葉（'Behold me then, me for him life for life / I offer, on me let thine anger fall'[III, 236-237] との共鳴を聞き取る読者がいるのも故のないことではない。[7]

言葉でアダムの赦しを求めるイブは，動作でも夫の赦しを求めている。「あなたに嘆願する者として/乞い願い，あなたの両の膝を離しません」（'thy suppliant / I beg, and clasp thy knees' [X, 917-918]）と言いながらアダムの赦しを求めるイブは，言葉通り夫の足を抱きながらかれの足元に伏している（'Eve...at his feet / Fell humble, and *embracing* them, besought his peace' [912-913, 強調は西川]）。髪は乱れ，涙は止まらない（'with tears that ceased not flowing / And tresses all disordered' [910-911]）。このイブの姿は，自らの涙でイエスの足を濡らし髪で拭ったとされる，マグダラのマリアの姿を彷彿とさせよう。[8] マグダラのマリア同様，この場面におけるイブの所作には

深い痛恨から出た激しさ，下世話な言い方をすれば艶めかしさある。

しかしこの艶めかしさを伴ったイブの嘆願の動作こそがアダムを動かすのだ。すなわち

[H]er lowly plight
Immovable till peace obtained from fault
Acknowledged and deplored, in Adam wrought
Commiseration[.]
（罪を認め，嘆いた上での
和解が得られるまで，その場を動くまい，とかたく誓った
イブの，身を低くした姿が，アダムに
同情心を引き起こした）　(937-940)

とある通りである。赦されるまでは動かない（immovable），というイブの不動の（immovable）決意を伴った平伏の姿勢が，アダムの心を再度動かす（move）のだ。自分の方から交わりの回路を閉じてしまった手前，アダムはそう簡単に妻へ棘のない態度を見せることは出来ない。だが「心を和らげられ」（'his heart relented' [940]），「怒りを捨てた」（'his anger all he lost' [945]）と形容されたかれの口から

But rise, let us no more contend, nor blame
Each other, blamed enough elsewhere, but strive
In offices of love, how we may light'n
Each other's burden in our share of woe [.]
（さあ，立て。言い争うのは，たがいに責めあうのはもう
やめにしよう。余所でもう十分責められたのだから。かわりに
愛の勤めに励もう。どうしたら，苦しみを分かちあっている中で

たがいの重荷を軽くすることが出来るかを考えて）　（958-961）

という言葉が出てきているのには注目したい。アダムは「我」（I）だけで完結する世界から出て，再度イブという「汝」（thou）との交わりの中へ――「愛」（love）のある「私たち」（we）の世界へ――戻り始めている。そしてこの交わりへの帰還を実現させたのは，イブの悔恨のことばに加え，涙を流し，髪を乱して足元に伏すという，多分に官能性を伴った所作であったのだ。

この場面について「愚かにも女の魅力に屈して」（'fondly overcome by female charm'［IX, 999］）堕罪したアダムが，再び自分の妻の魅力に屈しているのを描いたのみ，とシニカルに解することも出来よう。しかし，夫婦の交わりと神との交わりの不可分性，というこの小論のテーゼに立てば，もう少しポジティブな見方も可能であると思う。失楽前にはことば・からだによる夫婦の間の交わりが，そのまま人と神との間の交わりになっていた。ならば，失楽が経験された今，今度は夫婦の間の交わりを取り戻そうとする行為――それがことばによるものであれ，動作によるものであれ――は，神との交わりの回復への出発点になり得ないか。事実，この後の二人の会話は互いの絶望を解くいわば教理問答（カテキズム）のように展開していき，最後には神へ向かっての祈りに結実する。とすれば，堕罪前のアダムとイブの間に見えた親しい交わりがここで復活し，神への交わりの復活の契機になっていると言えよう。アダムと神との間のいわば仲立ちをしているこの場面のイブは，マグダラのマリアであると同時に聖母マリアの役割も演じているのだ。[9]

さらに言えば，語り手自身がそういう読みを促してると思う。赦しを乞うイブにアダムの頑なさが和らぐ様の描写を読み直してみよう。語り手が

soon his heart relented
Towards her, his life so late and sole delight,
Now at his feet submissive in distress,

Creature so fair his reconcilement seeking,
His counsel whom she had displeased, his aid[.]

（程なくかれの心は彼女に対して
和らいだ。つい先般まで唯一の喜びであった彼女に対して。
今，その美しい女が自分の足元に，苦悶しながらおずおずと伏し，
自分との和解を求め，機嫌を損ねた相手である
この自分の忠告と，助けを求めている）　(940-944)

と記すとき，その言葉は描出話法的に響かないか。語り手が，アダムの心中の声をかれに代わって伝えているように聞こえるのだ。自らの声とアダムの心中の声とを束ねることで，語り手は平伏するイブにほろりとするアダムに――かつ読者に――共感という形の追認を与えているかのようだ。[10]

だが夫と妻との間に和解が成立し再び交わりの回路が開かれたといって，かれらの苦境が完全に打開されたわけではない。アダムを精神の閉鎖状態から引きだしたイブであるが，彼女があらためてかれに語る言葉を耳にすると，彼女自身が別種の精神の閉鎖状態から自由でないことが露呈する。罪が子孫に伝播する苦しみをアダムが再度嘆く(965)のを耳にしたイ は，まず子孫を残さぬこと('Childless thou art, childless remain'[989])，さらには心中すること('Let us seek death, or he not found, supply / With our own hands his office on ourselves'[1001-1002])を提案する。いずれの提案もそれじたい絶望的なものだが，夫婦の交わりと神との交わりとの関係，という視点から考えた際より問題になるのは，その動機，特に心中の提案に見られる動機だ。「あなたがそう思うなら」と形の上でアダムに判断を任せながらも，イブが

[If thou judge] it [is] hard and difficult
Conversing, looking, loving, to abstain
From love's due rites, nuptial embraces sweet...

（語らい，見つめあい，愛していながら
甘美な抱擁という，愛の当然の儀式を控えるのが
つらく難しい[とあなたがお思いになるのなら...]　(992-994)

と禁欲の難しさを語る時，そこには「どうしてお前との交わり，愛を/ 捨て去ることが出来よう」（'[H]ow [can I] forgo / Thy sweet converse and love so dearly joined [?]' [IX, 908-910]）という，失楽直前のアダムの言葉の反響があるからだ。どちらの言葉にも夫婦の交わり——特にイブの言葉の場合，体の交わり——への耽溺が聞き取れるのだ。同じ耽溺は続く彼女の言葉，つまり

...[W]ith desire to languish without hope,
Before the present object languishing
With like desire... would be misery
And torment less than none of what we dread[.]
（欲望はあるのに希望はなく
眼前の相手も同じ欲望に焦がれながら果てて
いくのを見るなんて，私たちが怖れるものの中でも
これ以上の悲惨・苦悩はありません）　(995-998)

において一層明白になる。「欲望はあっても希望はなく」といういかにも修辞的な言葉から聞き取れるのは，「欲望」（desire）が満たされぬ所に「希望」（hope）はないという，鉛直方向の希望を求めることを忘れた性愛第一主義だ。

今度はアダムがイブを救う番である。まずイブの提案の中にかえって性愛への偏愛があることを指摘し（'anguish and regret / For loss of life and pleasure *overloved*' [1017-1018, 強調は西川]），次いで神の裁きを軽んずる愚かさ・傲慢さを戒めている（'such acts / Of contumacy will provoke the Highest / To make death in us live' [1026-1028]）。これだけでもアダムが

神学的センスを回復しつつあることが了解されるが，より注目すべきは，かれが神の御子がかれらに下した裁定を思い出し，妻にもあらためて思い出させていることだろう。すなわち

[L]et us seek
Some safer resolution[...]calling to mind with heed
Part of our sentence, that thy seed shall bruise
The serpent's head[.]
（より穏やかな解決を
求めようではないか...汝の裔が蛇の頭を砕く，という
私たちに下された裁きを注意深く
思い出しつつ）　(1028-1029, 1030-1032)

と，「汝の裔は蛇の頭を挫く」(179-181) という予言に妻の注意を向けさせ，

piteous amends, unless
Be meant, whom I conjecture, our grand foe
Satan[.]
（その蛇というのが
推測するに，我らの大敵セイタンでなければ，
復讐といっても哀れなものだ）　(1032-1034)

と，「蛇」をセイタンと特定している所である。セイタンへの復讐は神の計画のうち (cf. 'ordained'[1039]) であり，その実現のためにも，子供を残さない，あるいは心中という選択肢を放棄するよう説得しているわけである。女の裔と蛇の裔の戦いという，人類全体の救済に関わる予言を先に思い出したのは，実はイブであった ('[L]et there be...one enmity / Against a foe by doom express

assigned us' [924-926])。それをかれの方が解釈を深めて再提示しているのがこの箇所なのだ。こういう構造を考えてみれば，この場面におけるかれらのやりとりは教理問答(カテキズム)に喩えられよう。夫と妻が互いに教師となって，神の計画＝摂理への気付かせあい，祈りという形で神との交わりを回復する上での準備の働きをしているのである。

失楽前の二人の生活において祈ることは夫婦としての生活に直結していた。とすれば祈りがとり戻された時に，アダム・イブの間の交わりが本来の姿に戻ることになろう。その瞬間はもう遠くないようだ。その証拠にアダムは

> How much more, *if we pray him,* will his ear
> Be open, and his heart to pity incline [?],
> (私たちが祈るのであれば，あの方は耳をさらに開いて
> 下さり，そのお心はさらに憐れみに傾こう) (1060-61，強調は西川)

と，あるいは

> And what may else be remedy or cure
> To evils which our own misdeeds have wrought,
> He will instruct us *praying* [.]
> (他ならぬ私たち自身が引き起こした悪に対して
> 他にどんな癒し，解決の方向があるかは，
> 私達が祈りさえすれば，教えてくれよう (1079-1081，強調は西川)

と「祈る」ことをイブに提案している。罪悪感に打ちのめされた二人にとって，祈りは賛美というよりは「懺悔」('confess' [1088])であって，「涙」('tears' [1089]) 混じりの「ため息」('sighs' [1090]) にしかならぬかもしれない。[11] だが，裸の自分たちに衣を着せてくれた配慮(provision)の中に神の摂理(providence)

がすでに働いているのを悟った（'His timely care / Hath unsought been provided'［1067-69，強調は西川］アダムには，その祈りの聞かれる確信がある（'*Undoubtedly* he will relent'［1093，強調は西川］）。この確信を共有するからこそイブもアダム共々，裁きの場へと戻り，伏して祈るのだろう（1097 ff）。

互いの語らいの不通が引き金となって堕罪した二人は，語らいを通して回心するに至った。その成果が第十巻結びの祈りといえよう。夫婦の交わりの再開は神との交わりの再開をももたらした。

[T]hey forthwith to the place
Repairing where he judged them prostrate fall
Before him reverent, and both confessed
Humbly their faults, and pardon begged, with tears
Watering the ground, and with their sighs the air
Frequenting, sent from hearts contrite, in sign
Of sorrow unfeigned, and humiliation meek.

（かれらはただちに，裁きを受けた
場所に赴いて，御子の前にうやうやしく
平伏し，二人とも謙遜にかれらの
罪を告白して，赦しを乞い願った。涙が
大地を濡らし，溜息が大気を
満たした，どちらも悔い改めた心から
偽りなき悲しみ，柔和な謙遜の証として出たものだった）

（1098-1104）

やがて楽園を追われることになるアダムとイブ。だが「はるかに幸いな内なる楽園」（'a paradise within...happier far'［XII, 587］）を約されもする。と

すればかれらは，どこに赴くことになっても，かれらが語らい，交わる場そのものを祈りの場にすることを許されたともいえよう。失楽前，楽園，なかんずく至福の四阿をかれら二人だけの小さな教会としていたかれらは，失楽後「全世界を目前に」（'The world was all before them'［XII, 646］）して，かれらが互いに愛し，交わる場所そのものを，「聖霊の宿る宮」（コリント人への手紙第一6：19）とすることになるのだ。

注

『楽園喪失』からの引用は，Alastair Fowler, ed., *Milton: Paradise Lost*(1968; London: Longman, 1998）による（以下Fowlerと表記)。ミルトンのその他の作品からの引用は個別の注を参照。訳は西川による。英訳聖書からの引用は欽定訳による。

なお第V部は，西川が「独白の呪い，対話の癒し――『楽園喪失』第X巻，720-1104行を読む」（東洋学園大学紀要第9号[2001年3月]，77-94頁）として発表したものを圧縮した上で，本稿の論旨にあわせ修正・加筆したものであることを記しておく。

1　C. S. Lewis, *A Preface to 'Paradise Lost'* (Oxford: Oxford UP, 1942. Paperback ed., 1961), 125.

2　Rosenblatt は，ミルトンが離婚論の一つ『四絃琴』(*Tetrachordon*) の中で，イブと別れることを「自分を失うこと」と考えたアダムとは対照的に，信仰を捨てるよう配偶者から強制されることこそ「自分を失うこと」と主張している点に注意を促す。Jason Rosenblatt, *Torah and Law in Paradise Lost* (Princeton: Princeton UP, 1994), 200.『四絃琴』の該当箇所は，Ernest Sirluck, ed., *Complete Prose Works of John Milton*, vol.2. (New Haven: Yale UP, 1959), 681. このような離婚論の主張を根拠に，この場面におけるアダムに「離婚」という選択肢があったのでは，という仮定するのは不可能ではなかろう。ただし本稿V節で論じるように，妻を離縁することはせず，むしろ妻との交わりを回復したことがアダムの精神の再生に繋がっているのが，『楽園喪失』における夫婦の有り様である。論者としては，この点こそが離婚論或いは『サムソン・アゴニスティーズ』等と比べた際に際立つ『楽園喪失』の特徴と考える。

3　James Grantham Turner, *One Flesh: Paradisal Marriage and Sexual Relations in the Age of Milton* (Oxford: Oxford UP, 1983), 301. ただしTurnerは，失楽前後の二人のからだの動作の「違い」を認めつつも，「類似点」も同様に読者の関心を引いてしまう，とも記す。本論文104-105，及び注4参照。

4　この箇所についてFowlerは旧約聖書『箴言』第7章18節の娼婦の言葉（'Come, let us take our fill of love until the morning: let us solace ourselves with love'）への引喩を指摘する。Fowler, 530. それはその通りであるが，1046行目以降，「悪しき果実」の効果が二人の上に明確に現われるまで，描写の方も明確な糾弾は控えているように論者には読める。例えば二人の眠りについて，「重苦しい」(grosser) というはっきり否定的な形容詞を使用するのを1049行目まで引き延ばし，1044行目では中立的ないしはプラスの連想をもつ「露のような」(dewy) を用いているのはその一つ

の証拠になろう。Turner, 301-302も参照のこと。

5 John Broadbent, *Some Graver Subject: An Essay on 'Paradise Lost'* (London: Chatto & Windus, 1960), 80.

6 例えば, Jun Harada (原田 純), 'The Mechanism of Human Reconciliation in *Paradise Lost*' (*Philological Quarterly*, vol. L, no.4 [1971]), 547。ただし原田氏も, 'Eve's 'me' is not so egoistic as Adam's' と付け加えている。

7 例えば Joseph Summers, *The Muse's Method: An Introduction to 'Paradise Lost'* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1962), 179. 或いは Barbara Lewalski, *'Paradise Lost' and the Rhetoric of Literary Forms* (Princeton: Princeton UP, 1985), 252

8 Fowler はこの場面について, マグダラのマリアの改悛を描いた Titian の絵の影響を見る。Fowler, 589.

9 『楽園喪失』におけるマリアの扱いについては, 佐野弘子「イヴからマリアへ——ミルトンの救済史——」(十七世紀英文学会編『十七世紀の英国文化』[金星堂, 1995], 136-153頁)が詳しい。

10 同種のことは少し前, イブがアダムの前に伏す場面における語り手のトーンについてもいえよう。例えばDavies は, この場面における語り手の声を, 注意深く中立的にデリラの登場を告げる『サムソン・アゴニスティーズ』のコロスの声と比較して, 「同情と好感と敬意とが入り混じっており読者を当惑させる」と記している。Stevie Davies, *John Milton* (New York and London: Harvester Wheatsheaf, 1991), 201.

11 Lewalski, 253.